

# 「交わり」の超越的契機

——偶然性から必然性へ——

深 谷 潤\*

## はじめに

人間が社会的存在である限り、自分以外の他者との協調は不可欠であり、そこには常に出会いがあり、また交わりがある。ある意味で、すべての教育活動は、人と人との出会いと交わりによって成立するとも言える。

「出会い(Begegnung)」を教育学の対象として論じた、ドイツの教育学者O. F. ボルノーは、ヤスパースやキルケゴール、ハイデッガーの哲学の影響を受けていると言われている。<sup>1)</sup> 例えば、ヤスパースの「交わり(Kommunikation)」の概念のもつ「冒険(Wagnis)」の特徴は、偶然性や予測不可能性というボルノーの「出会い」の性格を基礎づけていると言える。<sup>2)</sup> ヤスパースは、「出会い」の偶然性を「交わり」の必然性という宗教哲学的発展の発端として位置づけていた。つまり、彼によれば、「出会い」は単なる一時的な出来事として判断されるのではなく、その出来事の背後に超越的存在者の導きがあると考えべきであり、その意味で必然的なものなのである。換言すると、「出会い」は、必然的出来事としての「交わり」の一形態である。

しかし、ボルノーは、ヤスパースのこのような「交わり」の必然性を発展させることなく、逆に「出会い」の偶然性や予測不可能性を再び指摘するに留まっている。例えば、彼は「出会い」を比喩的に二隻の船が反対方向からやってきて、互いにそばを通過するようなもの、と定義している。<sup>3)</sup> その船は二隻とも動いているので、どこですれ違うのかは予測が困難であるため、「出会い」は偶然的で予測困難である、と言う。確かに彼は、「出会い」を単なる偶然的出来事で終わらせることなく、「交わり」、「共同」といったものも

含めて考察している。<sup>4)</sup> しかし、「出会い」のもつ偶然性と予測不可能性を乗り越える理論を、ボルノーの教育学から導き出すことは困難であると言えよう。むしろ、ヤスパースの「交わり」の概念にもどって、「出会い」の偶然性という課題に取り組むべきであると考ええる。

以上から、本論文では、ヤスパース哲学を手がかりに「交わり」の解明を行う。

本論文の目的は、「交わり」の特徴を指摘するだけではなく、同時に人間同士の「交わり」の中に超越的存在者である「神」と関わるための契機を探ることである。この契機が、「出会い」の偶然性を「交わり」の必然性に転換する重要な要素である、と仮定する。また、「交わり」の超越的契機の探求は、ヤスパース哲学の本質を解明する意義だけではなく、教育学と宗教との関係を考察する視点を提示する、という意義があると考ええる。

## 1. 先行研究

先行研究は、海外ではカウフマン、イベレール、M. ヨウルダン、ボック、フックス、国内では斎藤武雄、増渕幸男のものがあげられる。<sup>5)</sup> 海外の先行研究に関して、増渕は特にイベレール、M. ヨウルダン、ボックを次のように批判している。つまり、イベレールは、ヤスパース哲学を教育学の分野へ開拓している功績があるが、しかし、「交わり」と「理性」ととの関係が見いだされていない、のである。<sup>6)</sup> また、M. ヨウルダンは、教育実践に「交わり」の概念を応用した結果、「交わり」を拡大解釈してしまった、と言う。<sup>7)</sup> さらにボックは、逆に「交わり」を「実存的交わり」に偏って掘り下げたため、「交わり」のもつ範囲を狭めてしまった、と批判されている。<sup>8)</sup>

一方、カウフマンとフックスの研究は、「交わり」の必然性を考察する上で示唆に富んでいる。カウフマ

\* 本学保育科専任講師（教育学）

ンは、人間同士の交わりと人間と神との「連関 (Bezug)」に注目し、「交わり」の領域を人間と神の中間に定めている。<sup>9)</sup> 彼は、ヤスパース哲学に則って、神と人間との「交わり」を否定しながらも、「神と交わらなくても、真の交わりは神の中にその場をもつ」と言及している。<sup>10)</sup> また、フックスは、「交わり」の超越性について言及し、「交わりは根本的に実存的超越の力によって活性化する」としている。<sup>11)</sup> この二人の研究から解することは、人間同士の「交わり」が神、もしくは超越的存在者と深く関わっているということである。さらにこの「超越的」関わりを探究することによって、「交わり」の必然性を解く鍵を見いだしたい。そこで、まず、彼の「交わり」の概念を概観することから始めることにする。

## 2. 「現存在的交わり」と「実存的交わり」

ヤスパースは、元々精神病理学の学者であったが、医者と患者との関係を経験するにつれて、自己と他者の意識の深まりを哲学的に考察し始めた。彼はボルノーと同様、自己と他者との「出会い」の重要性を認めていた。さらに、両者の継続的交流の意義を強調し、それを「交わり」と規定した。基本的に「交わり」は二人の人間同士のみに成り立つ様々な活動を総称している。しかし、その「交わり」は彼によると大きく「現存在的交わり (Daseinskommunikation)」と「実存的交わり (existentielle Kommunikation)」の二つに分類できる。

「現存在的交わり」は彼によると、「現存在の中で、様々な仕方で営まれる他の人々との共同生活」である。<sup>12)</sup> 「現存在」は現実世界の様々な規制に縛られている人間の在り方を表現している。例えば、民族、人種、性別、年齢、社会的地位、財産などにとらわれた人間の意識が、そのまま人間の在り方をも規定しているような生活は、「現存在的交わり」にあるといえるのである。

一方、「実存的交わり」は、この「現存在的交わり」に生きざるおえない人間が、その生活の中で自己を解放する他者と「出会い」、様々な規制を自己の中で了解し、克服することによって「自由」な自己、すなわち「実存 (Existenz)」になるために、他者と切磋琢磨する生活である。その生活は、「現存在的交わり」における規制を克服するために多くのエネルギーを必要とする。

しかし、ヤスパースはあくまで解放された自由な自

己を目標としている。彼は、「実存的交わり」を比喩的に「愛しながらの闘い (liebender Kampf)」<sup>13)</sup> と呼んでいる。つまり、「交わり」は自己と他者が相対する「闘い」なのである。しかし、それは勝敗の決まる類の「闘い」ではない。むしろ、いつまでたっても結果の出ない永遠の「闘い」である。人間の自由が、所有物として獲得されることが永遠にないように、この「闘い」は本来あるべき自分、彼の言葉を借りれば、「本来的自己 (das eigentliche Selbst)」<sup>14)</sup> という究極的な人生の目標としての自由を追い求めて生きるという人間の在り方を示しているのである。

「現存在的交わり」から「実存的交わり」への移行は、「現存在的交わり」に安住することの「不満 (das Ungenuegen)」が重要な契機になっている。ヤスパースは、

現存在的交わりに対する不満は一層深い実存的交わりへと私を覚醒させるところの刺激の針である。<sup>15)</sup>

と述べている。また、増淵は、現存在的交わりの中では、非永続的なものにしか満足を得られず、結局自由な自己存在にとっては不満が避けられない、と指摘している。<sup>16)</sup>

それでは、「不満」はどんな場合に生じるのであろうか。それは自己の中に現状の規制を突破したいという意志がある時である。換言すると、「自由 (Freiheit)」<sup>17)</sup> への意志がある時なのである。人間はこの世に生きている以上、様々な規制の上に存在している。つまり、「現存在的交わり」の中にあるのである。しかし、ヤスパースによると人間は本来的に自由を望む存在なのであり、「現存在的交わり」に埋没したままにいる者ではない。<sup>18)</sup> 「不満」とは、本来的に自由な存在である自己が、現実にはそうではない状況にある自己に対する意識である。そのような自己意識としての「不満」は、「交わり」の中で他者の自由に触れ、自己が現実世界で規制に束縛された状況下にあると自覚した場合、もしくは他者が不自由な状況にあり、自己もそうなりたくないと感じている場合のどちらかで生じると考えられる。後者の場合は、いわゆる「反面教師」としての他者であるが、この場合、自己が自由な存在になるためには、消去法的選択しか残されていない。ヤスパースはこれに関して次のように述べている。

他者がかれ自身であろうとしないならば、私は私自身となることができない。他者が自由でなければ、私は自由であることができない。<sup>19)</sup>

反対に、前者の場合は自由な他者のようになりたい、と思う場合であり、他者を自己の模範とし、他者との「交わり」の中で自己を成長させていく事が可能となる。

従って、自己が「交わり」の中で他者の自由に触れるためには、すでに他者が自己に先んじて「自由」への意志をもって、その実現に努力している状態でなければならない。<sup>20)</sup>

「実存的交わり」は、以上から、「自由」という本来あるべき姿を目指して現実世界の様々な規制を克服し合う活動であると言えよう。しかし、その際に、様々な障害を乗り越え、試練に耐えていく厳しさが、両者に必要とされる。そのためには、自己と他者は互いを「自由」を求める同士として尊重し、信頼し合わなければならない。これがヤスパースのいう「愛しながらの闘い」の意味である。

さて、「交わり」の必然性を考察する上で、この「自由」と必然性の関係を避けて通ることはできない。上記の意味での「自由」は、ヤスパースの「実存的自由(die existentielle Freiheit)」<sup>21)</sup> であると考えられる。この「実存的自由」は、彼によると二つの必然性の間に存在するという。つまり、それらは、「自然法則性(Naturgesetzlichkeit)」と「当為法則性(Sollensgesetzlichkeit)」である。<sup>22)</sup> これらは、人間は物理的法則に従って、物に躓いたら転び、また殺人を犯したり、物を盗んだりしてはいけない、と知っている存在である、と述べているにすぎない。仮に、これらの必然性のみ「交わり」の必然性が限定されていると考えるならば、「交わり」における「自由」の実現は、物理的・社会的・倫理的必然性が有効な領域のみに可能である、という結論になるであろう。しかし、ヤスパースの「自由」に関する次の言及は、それがさらに深い次元で語られるべきものであることを示唆しているのである。

(...) 自由の絶頂においては、我々の行為は必然的であるように思われる。

しかし、それは自然法則によって不可避免的に生起するという外的強制によってそうなのではなく、むしろ他に欲しようがないというような仕方て意欲する人の内的な承認としてそうである。ところ

でこのような意味における自由の絶頂においては、我々は、自分が自由であるということにおいて、超越者から我々に贈与されているという意識をもつのである。人間が本当の意味で自由であればあるだけ、それだけ彼にとって神の存在が確実となるのである。私が本当の意味で自由である場合、私は私自身によって自由であるのではないということ、私は確認するのである。<sup>23)</sup>

ここから、「交わり」の必然性の根底には、「超越者」や「神の存在」という、宗教的次元があることがわかるのである。ヤスパースによれば、「(...) 自由はただ超越者を通じて超越者とともに存する」<sup>24)</sup> のであり、「自由」と「超越者」は不可分な関係にある。それ故、「自由」をその目的とする「交わり」において、一見偶然的に見える自己と他者との様々な出来事にも、その根底に必然的な「超越者」の働きを読みとる視点が必要とされるのである。

さて、この「超越者」に関しては、先述の「愛しながらの闘い」をさらに分析していく中で明らかにされる。

### 3. 「交わり」における「愛」の特徴

「実存的交わり」の成立に不可欠な条件は、自己と他者が「愛」を基礎とした関係になっていなければならない。ヤスパースにおける「愛」の概念の特徴は様々あげられるが、まとめてみると、根源性・結合性・超越性の三つになる。<sup>25)</sup> これからそれぞれ説明していきたい。

まず、ヤスパースは「愛は交わりの源泉である」<sup>26)</sup> と述べている。「実存的交わり」は規制の克服のために多くのエネルギーが自他ともに求められる。「交わり」の活力となるものが彼によれば、「愛」である。また「愛」は自分だけではなく、相手もまた生かすものでなければならない。もし「愛」がなければ、その「交わり」は「愛」のない「闘い」にすぎなくなり、それは互いを破壊し合う行為となる。

また「実存的交わり」の「源泉」である「愛」のさらなる源は、ヤスパースによると人間にはない。確かに「愛」は、自己の他者に対する深い意識<sup>27)</sup> として人間同士に働くものである。しかし、彼は「愛」を究極的に人間を含めたあらゆる存在を包み込むものと捉えている。<sup>28)</sup> すなわち、「愛」は人間を超越した存在、つまり「神」にあるという結論に落ちつくのである。

換言すると、「神」の「愛」が人間の「実存的交わり」の源泉なのである。

さて、「交わり」において「愛」が働くためには自己と他者の二人の存在者が前提とされる。その際、自己と他者の関係の在り方が重要となる。つまり、自己と他者が「私」と「あなた」という一対一の間関係をもっているのか、それとも自己と他者が一体となり、「私」と「あなた」の区別がつかない状態になっているのかによって「愛」の性格も異なってくる。まず、前者の場合、自己と他者は「私」と「あなた」という一人の人格としての個別性を保っている。そこでは両者が「交わり」の目標である「自由な自己」を目指してより互いを意識し、良きパートナーとして結びつきを深めていく。しかし、両者は決して相手の人格を破壊したり、反対に自分を殺して相手に同化しようとはしない。自己を他者と区別し、分離しつつ、自由という目標において結びついているのである。そのような自律的な人間関係を「愛」は成立させるのである。

一方、後者の場合、「交わり」において自己と他者の人格が相互に意識されていない状態である。そこでは、「愛」は両者をしっかりと捉えることができない。その結果、「愛」は自己や他者の自律を促すことはできず、「自由な自己」も他者の関係ぬきに捉えられるため、「交わり」は自己中心的なものとなる。そして、そこに働く「愛」はエゴイスティック、またはセンチメンタルな性格をもつのである。このような関係は、もはや「実存的交わり」の範疇に入れることはできない。

さて、人間同士に働く「愛」は、互いに自由を求め合うという課題を持つために、必然的に人間から人間を超越した神へ向かうのである。何故なら、この世において様々な規制や条件の下で自由を求める人間は、互いにそれらを取り除き、また克服する「闘い」を行わなければならない。そして、この「闘い」が絶望に終わることなく、希望をもって継続するためには、神への信頼がなくてはならないからである。この点において、ヤスパースの「愛」の概念は極めて「信仰」に近い特徴を持っているのである。彼は次のように述べている。

愛のうちには絶対的信頼 (das absolute Vertrauen) がある。(…) 愛の信頼は、打算や諸々の保証に基づくのではない。私が愛することは、授けられたもののごとく (Geschenk) であって、しかもそれが私の本質である。<sup>29)</sup>

つまり、「愛しながらの闘い」としての「実存的交わり」は、神への「信仰」が基礎となっているということもできる。「愛」をめぐる人間と神との関係を彼は次のように述べている。

我々は人間なしには神を愛し得ず、神なしには人間を愛し得ないということは、我々の真存在の根本特徴である。<sup>30)</sup>

これが意味することは、自己と神との「関わり」は、他者である自己以外の人間を通して成立し、一方、人間同士の「交わり」において神の存在が前提とされているということである。

さて、ボルノーが残した「出会い」の偶然性・予測不可能性という課題は、果たして、これまで述べてきたヤスパースの「交わり」の概念によって克服可能であるだろうか。

ボルノーの「出会い」は、それによって人間存在の根源が揺さぶられ、覚醒させられるほどの出来事であり、<sup>31)</sup> ヤスパースの「実存的交わり」と共通した点が多い概念といえる。ボルノーは、神、という視点から「出会い」を位置づけていないため、あくまでそれは人間間の出来事として、偶然で予測不可能であると結論づけるしかなかったのである。しかし、ヤスパースは、「実存的交わり」が「愛しながらの闘い」であり、その「愛」の根源は「神(超越者)」であると考えた。「交わり」は、「愛」を契機として、人間を超越した神との「連関」をもっているのである。そのことは同時に、人間間の偶然的出来事を、神の必然的計画上の出来事として予測させる。ここで言う「必然性」とは、神の意図を人間が推測し、そしてそれを確信する際に、初めて登場する概念である。つまり、「信仰」の次元で語られるべきものである。ボルノーの「出会い」は、「信仰」とは無縁のように思われる。一方、ヤスパースの「交わり」は、現象上、人間間の出来事に制限されてはいるが、その根源には常に神の存在があり、「信仰」が「愛」と並ぶ重要な「交わり」の源泉となっているのである。「交わり」が人間間のみ当てはまることに束縛されると、相変わらず神は「交わり」の源泉に位置づけられたままであり、カウフマンやフックスが指摘した人間と神との超越的関わりは、解明されずに終わってしまう。そこで、「信仰」する者にとって、神の「愛」が伝達される何らかの媒

介が、人間間の「交わり」以外の形態の中に用意されていなければならない。それでは、次に、神の「愛」が人間にどのような形で伝わるのか、その媒介となるものを探ることにしたい。

#### 4. 「人格性(Persoenlichkeit)」の役割

キリスト教では、神の「愛」はキリスト・イエスによって証されていると説いている。イエスは三位一体における第二番目の「位格」である「神の御子」として神学的に位置づけられている。教育学的表現を用いれば、イエスは神の「人格性」を表しているといえる。さて、ヤスパースは神の「人格性」は神の超越性を妨げる要因となるとして認めていない。しかし、神と人間との間に「祈り」という行為を認め、神から人間への「人格性」としての語りかけの意義を指摘している。

祈りにおいて人間は、神から人格として語りかけられているのを感じ、そして人格として神に語りかける。<sup>32)</sup>

この「神からの語りかけ」は、ヤスパースにおいて、神の「愛」を人間に伝える一つの形式として考えることが可能である。この「語りかけ」によって成り立つ関係は、神と人間との応答関係と言える。そこにおける「人格性」の役割は彼の次の言葉にも示されている。

人格であるという局面において神性が我々に関係づけられ、それと同時に我々の方は、この神と語ることもできる様な存在者へと高まるのである。<sup>33)</sup>

ここからもわかるように、「人格的神」を否定するヤスパースにおいても神と人間との応答関係において「人格性」の役割を認めざるおえないのである。仮に神に「人格性」があり、それが神から人間への「愛」を媒介するものであるとしたならば、神の「愛」は「祈り」の中で人格的存在となっている自己に「語りかける」という形で具体化されるであろう。つまり、その際神の「愛」を自己が自覚するのは、神の言葉が私という一人のかけがえのない個人に向けられたと感じる瞬間なのである。ヤスパースは、直接神の「人格性」を認めているわけではない。しかし、それが何ら

かの形で承認されなければ神と人間との応答関係は、成立しないことになる。彼は、神の「暗号(Chiffre)」という概念を用いてこの問題を処理した。しかし、彼によると「暗号」は多様な形態をとり<sup>34)</sup>、実体を間接的に提示するにすぎない。神の「愛」を媒介し、「実存的交わり」にみられるような自己と他者との関係をしっかりと結び付け、かつ両者の個別性を確保する人間の「愛」に導く形式として、「暗号」は弱いものがある。カール・バルトはヤスパースの「神の暗号」に対して「内容のない(inhaltlos)」「実りのない(unfruchtbar)」ものと批判している。<sup>35)</sup>

#### おわりに

ヤスパースの「交わり」は、「愛しながらの闘い」という表現からもわかるように、現実的束縛の中でそれを乗り越えようと努力する厳しさを自他共に要求するところにその特徴がある。その意義は、「出会い」の後に成立する人間関係を「愛」を基本としながら「自由」を求める「闘い」として捉えたことである。それは決して表面上の友好的関係に留まらず、現実的に立場が違う者同士でも相互に批判し合える関係である。また「交わり」の超越的契機は、「愛」にあり、人間同士の「愛しながらの闘い」における「愛」は、神にその源をもつことが説明された。このような「交わり」のもつ宗教的次元は、自然法則や倫理的法則の下にある偶然的「出会い」を必然的出来事として解釈する契機を提供するものである。それは自己意識の根源的形態であり、「信仰」と言うことも可能である。

また、「信仰」に基づく人間は、「神」と「人格性」において応答関係をもち、「愛」は「人格性」を媒介として神から人間に、そして人間同士に伝えられるのである。

本論文では、「交わり」の源となる「愛」が、究極的に神から人間へ「人格性」を通して伝えられることをあくまで示唆するに留まった。さらに今後、「愛」と「人格性」との関係を明らかにすることが課題となる。

#### 《註》

- 1) ボルノー著、『実存哲学と教育学』、峰島旭雄訳、理想社、1987年、p. 303
- 2) *Philosophie II* (PhII), 4. Auflage, Springer-Verlag, Berlin, Heidelberg, New York, 1973

- S. 64
- 3) ボルノー, p. 158
- 4) *Ibid.*, p. 157
- 5) Kaufmann, Fritz: Karl Jaspers and a Philosophy of Communication. in: *Karl Jaspers*. Open Court Publishing Co. Illinois, 1957
- Iberer, Gunter: *Die paedagogische Relevanz des Kommunikationsbegriffes bei Karl Jaspers*. (Diss.) Graz 1970
- Manfred Jourdan, Hagen: *Moeglichkeiten und Grenzen einer Kommunikativen Paedagogik*, (Diss.) Dortmund 1974
- Bock, Irmgard: *Kommunikation und Erziehung. Grundzuege ihrer Beziehungen*. Darmstadt, 1978
- Fuchs, Franz Josef: *Seinsverhaeltnis — Karl Jaspers' Existenzphilosophie —*, Bd. I.: Existenz und Kommuikation, Frankfurt/M 1984
- 斎藤武雄, 『ヤスパースにおける絶対的意識の構造と展開』, 創文社, 1961年
- 増渕幸男, 『ヤスパースの教育哲学研究』, 以文社, 1989年
- 6) 増渕, p. 301
- 7) *Ibid.*, p. 302
- 8) *Ibid.*
- 9) Kaufmann, Fritz: Karl Jaspers and a philosophy of Communication, in: *Karl Jaspers*. Open Court Publishing Co., Illinois, 1957, p. 221
- 10) *Ibid.*, pp. 223-224, cf. *Philosophie III* (PhIII), 4. Auflage, Springer-Verlag, Berlin, Heidelberg, New York, 1973 S. 123, *Von der Wahrheit* (VdW), R. Piper & Co., Muenchen, Zuerich 1983, 380f. S. 897
- 11) Fuchs, S. 609
- 12) PhII, S. 51
- 13) *Ibid.*, S. 65
- 14) *Ibid.*, S. 49
- 15) *Ibid.*, S. 58
- 16) 増渕, p. 269
- 17) PhII, S. 193
- 18) PhII, S. 58, 「存在とは, 単に現存在の共存なのでなく, 実存の共存である。」
- 19) *Ibid.*, S. 57
- 20) ヤスパースの言葉を借りれば, 「可能的実存 (moegliche Existenz)」としての自己意識がある状態である。
- 21) PhII, S. 193
- 22) *Ibid.*
- 23) *Einfuehrung in die Philosophie* (Ein), Serie Piper, Muenchen, Zuerich 1992 S. 51
- 24) *Existenzphilosophie*, Walter de Gruyter, Berlin, New York, 1974 S. 21
- 25) 斎藤武雄は愛の8つの特徴を上げている。  
結合性 (p. 30, cf. VdW. S. 991), 単独性 (p. 40, cf. PhII, S. 278, VdW. S. 991), 公明性 (p. 46, cf. VdW. S. 1004), 分離性 (p. 52, VdW. S. 1006), 運動と安静 (p. 59, cf. PhII, S. 278), 根源性 (p. 66, cf. VdW. S. 988), 超越性 (p. 82, cf. PhII, S. 277), 包括性 (p. 90, cf. VdW. S. 992)
- 26) PhII, S. 71
- 27) 斎藤, p. 67 「実存の絶対的意識」
- 28) VdW, S. 992, 「(愛は)あらゆる包越者の包越者である。」
- 29) PhII, S. 278
- 30) VdW, S. 1003
- 31) ボルノー, 『哲学的教育学入門』, 浜田正秀訳, 玉川大学出版部, 1973年 p. 118
- 32) *Der philosophische Glaube angesichts der Offenbarung* (PGO), R. Piper & Co., 3. Auflage, Muenchen Zuerich 1984, S. 219/p. 233
- 33) Ein, S. 56
- 34) PhIII, S. 129-141, ヤスパースが指摘する形態は, 主に次の三つである。  
① 形而上学的経験 ② 神話, 啓示, 芸術作品  
③ 思想
- 35) Karl Barth: *Die Kirchliche Dogmatik*, III/4, Evangelischer Verlag AG., Zollikon-Zuerich, 2. Auflage, 1957, S. 549, cf. PGO S. 485

#### 《要約》

あらゆる教育活動において, 人間は様々な出会いと交わりを経験する。ボルノーは, 人格形成における「出会い」の意義を強調した。しかし, 一方彼はその

教育学的方法化の困難さ、すなわち、「出会い」の偶然性による計画不可能性を示唆するに留まった。「出会い」を偶然的出来事でおわらせてしまうのではなく、「出会い」からその後の「交わり」に発展し、より豊かな教育活動が可能になるためには、偶然性を克服する視点がなければならない。

ヤスパースにおける「交わり」の概念には、ボルノーの「出会い」の偶然性を克服する鍵が潜んでいると私は考える。ボルノーはヤスパースの哲学から多くを学びながらも、「出会い」の概念の中に「交わり」のもつ超越的契機を含めることはなかった。「交わり」の中で特に注目すべきものは、「実存的交わり」である。「実存的交わり」は、自己の「自由」を目指し、

「愛」に基づく「闘い」である。「交わり」における「自由」と「愛」は、「超越者」が必然的に関わっている。つまり、「交わり」の根源と目標には「超越者」が存在しているのである。「交わり」の必然性は、このように「超越者」を前提にするか否かによって、つまり「信仰」の有無によって左右されるものなのである。

また、「交わり」の源である「愛」は、「超越者」から自己へ伝達される。その際、両者には人格的關係が存在している。人格的形式をその媒体として要求することは、ヤスパースの「交わり」の概念に新たな課題を突きつけたことになる。何故なら、「交わり」はあくまで人間間において成立可能だからである。